

## 「超自然主義」と「超現実主義」 —『世界開闢説』と『地球創造説』の境界—

‘Surnaturalism’ and ‘Surrealism’

小谷内 郁宏  
Ikuhiro KOYAUCHI

(平成27年10月 6 日受理)

第二次世界大戦の戦前、戦後において日本を代表するシュルレアリスム詩人と言えば、瀧口修造（1903-1979）と西脇順三郎（1894-1982）であろう。西脇は1922年より約3年間のイギリス留学を終えて、1926年より慶應義塾大学文学部に教授として赴任した。西脇より9歳年少である瀧口修造はその当時の教え子であった。若き教授と瀧口を含む志高い学生たちは教室内の勉学に留まらず、文学的実践をすべく、先端的な海外思潮に関する資料・文献を読み、議論し、創作をし、そして前衛誌を創刊し、当時の文学界で時代を先導した。

西脇と瀧口の二人は終生、共に交流し、影響を与えるながらシュルレアリスム詩人として名を成したが、両者の考えるシュルレアリスムの思想には大きな相違があった。すなわち、西脇は学者として古今東西の教養を踏まえた独自の詩観に基づく自称シュルレアリストで本来的にはシュルナチュラリストであり、一方瀧口は真正のフランス・シュルレアリスムに由来するシュルレアリストであった。

この論考では、当時の時代背景を整理しながら、二人の交流を概観し、両者の詩論の内容、さらに両者の違いを代表作であり、モティーフが似通った『世界開闢説』（西脇 1926年）と『地球創造説』（瀧口 1928）の詩文を比較対照しながら、西脇と瀧口の詩観の相違をまとめていきたい。

### はじめに

1962年に、谷崎潤一郎、川端康成とともにノーベル文学賞候補になった学匠詩人、西脇順三郎は、イギリスから帰国後、1926年に慶應義塾大学の文学部教授になった。その時の教え子の一人に瀧口修造がいた。

西脇がイギリスに渡った1922年は世界文学史上、記念すべき年であった。ジェームス・ジョイスの小説『ユリシーズ』、T.S.エリオットの詩『荒地』がその年、発刊されたからである。この二編は20世紀を代表する画期的作品であり、今日においても問題を提起し続ける先端的小説であり、詩篇であると言われている。

また、1924年にはフランスで20世紀最大の前衛芸術運動であるシュルレアリスムの口火を切るブルトンの『シュルレアリスム宣言』が発表され、それは西脇が日本に帰る前年のことであった。当時、外遊すること自体が珍しい時代であり、文学者西脇の帰国が当時の日本の前衛芸術運動に多大な影響を与えること必然だった。

そして1926年に大学のキャンパスで西脇と瀧口が師弟として出会い、二人の思想は、当時の最新欧米思潮であるジョイス、エリオット、ブルトン、さらに萩原朔太郎らの新しい日本近代詩觀を媒介とし、不可避的に繋がっていった。すなわち、モダニズム、神話的思考、言語哲学、シュルレアリスム、精神分析学、言語実験、口語自由詩と言った思潮である。

## 1. 西脇順三郎と瀧口修造の邂逅

1922年7月（大正11年）、慶應義塾大学予科教員であった西脇（29歳）は慶應義塾留学生として英語英文学、文芸批評、言語学研究のためイギリスに渡った。そしてロンドンに滞在し、現地の作家、詩人、画家、ジャーナリストと積極的に交友した。

当時のイギリスの文化事情は以下のようであった。

T.S.エリオットの『荒地』、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』などが刊行される一方、大陸から未来派、表現派、ダダ、シュルレアリスム、キューピズムなどのモダン・アートが勢いよく流れこんだ時期であり、（中略）順三郎がこの一年間ロンドンでモダニズムの全盛期をなしていたイギリス文壇の空気を吸収し、現代詩、現代文学、前衛絵画、彫刻、音楽に親しんだことは、その後の順三郎の詩人誕生に決定的な影響を与えた。<sup>(1)</sup>

渡英して一年後、1923年10年、西脇はオックスフォード大学ニュー・カレッジに入学し、古代中世英語英文学を主として研究した。滞在中、スコットランド、英國北部、中部地方、さらにフランスにも旅行し、当時先端的であった印象派絵画にも接した。また私生活では、1924年7月に英国人画家マジョリ・ビットル（Marjorie Bittle）と結婚した。

1925年8月には、西脇は自費出版でロンドンのケイム・プレス社から英文詩集『Spectrum』を刊行した。この詩集は、彼にとっての処女詩集で、有力紙デイリー・ニューズ紙とタイムズ紙文芸附録の書評に取り上げられ、現地で文名を上げることになった。

しかし、2ヶ月後の10月、オックスフォード大学を中退し、日本への帰途に就いた。

そして1926年4月（大正15年 33歳）に慶應義塾大学文学部教授に就任した。担当科目は、「古代中世英語英文学」「英文学史」「文学概論」「言語学概論」であった。当時の文科学生には、後に詩人・作家となる瀧口修造、上田保、上田敏雄、三浦孝之助、中村喜久夫、またサルトル、カミュを日本に紹介した仏文学者で、後に慶應義塾大学の第13代塾長になった佐藤朔も含まれていた。

学生たちはヨーロッパの最新の息吹を吸ってきた若き教授の薰陶を受け、その西脇を中心に前衛誌を発行し、世間に未来派、ダダ、シュルレアリスム、イマジズムなどの新芸術運動を紹介することになった。

そして当時の状況を、瀧口修造は自らの年譜で次のように述べている。

この前年（筆者注：1925年 大正14年 瀧口22歳 西脇32歳）英国から帰った西脇順三郎教授にこの年（筆者注：1926年 大正15年）から卒業までの5年間教わる。最初の

英語のテキストはプラトンの「共和国」（英訳）であった。その講義ぶりに惹かれ、しばしば自宅を訪れるようになる。ここに「山繭」グループとは別に西脇教授を中心としたグループが生れ、上田敏雄、上田保、佐藤朔、三浦孝之助などの学生が、放課後、「白十字」に集り、天現寺の自宅まで押しかけて詩論や芸術論をたたかわすようになる。<sup>(2)</sup>

早速、翌年の1927年12月（昭和2年）には、西脇を代表者、佐藤朔を編集者として、日本最初のシュルレアリスム・アンソロジーである『馥郁タル火夫ヨ』が刊行された。当時の様子を、瀧口は以下のように語っている。

当時（筆者注：1927年 昭和2年）西脇教授を中心に集る仲間のあいだに佐藤朔の編集で『馥郁タル火夫ヨ』の出版を計画する。たまたま西脇教授がその詩的序文を書くとき、深夜二人対座しつつ附き合って、その発想の源泉にふれる想いをした。<sup>(3)</sup>

筆者が所蔵しているその復刻版を見ると、ページ数は25ページほどの大判（ほぼA4サイズ）の冊子で白色を基調とした瀟洒な造りのものであったが、その内容は斬新であった。ただ、この初号のみで継続発行されることはなかった。

この号で西脇順三郎は散文詩スタイルで序文を執筆しているが、その中で同人の芸術的志向とそのタイトルの由来を語っている。

現実の世界は脳髄にすぎない。この脳髄を破ることは超現実芸術の目的である崇高なる芸術の形態はすべて超現実主義である。故に崇高なる詩も亦超現実詩である。詩は脳髄の中に一つの真空なる砂漠を構成してその中へ現実の経験に属するすべてのサンサンション、サンチマン、イデ等をたたき落すことによりて脳髄を純粹にせしむるところのひとつ的方法である。ここに純粹詩がある。脳髄はウルトラ桃色のガラスの如きものになる。詩はまた斯くの如く破壊する。破壊されたる脳髄は一つの破壊されたる香水の如く非常に馥郁たるものである。ここに香水商館的名誉がある。（中略）また詩は脳髄を燃焼せしむるものである。ここに火花として又は火力としての詩がある。吾々は現実の世界を燃料としてゐるのみであって自然人の如く燃料それ自身を享樂するものでない。吾々はこの燃料たる現実の世界をもやしてその中から光明及熱のみを吸収せんとするものである。純粹にして温かき馥郁たる火夫よ！（下線部：筆者）<sup>(4)</sup>

少々長めに引用したが、この序文において西脇の考えていた「超現実主義」的詩觀の傾向あるいは偏向がはっきりと見て取れる。

辞書的には、「馥郁」は「よい香りが漂うさま」の謂いである。「火夫」とは、ボイラーナどの火をたく人、いわゆる「かまたき」で、加えて「火葬技師」のことも指す。「馥郁たる梅の香」という例文にあるように、「馥郁」が食欲を誘う臭覚的イメージを喚起する言葉であることに対して、「火夫」は汗にまみれた労働者といった視覚的イメージを喚起する。日常的、現実的には結び付かない両語を敢えて連結することによって、超現実的なイメージを喚起させる。そのプロセスが西脇の考えた超現実主義なのである。

確かに、西脇はおよそ3年間イギリスに留学し、当時の日本人の誰よりも直にヨーロッ

バの文芸思潮を知ることになった。そして帰国後は積極的にヨーロッパ事情を紹介した。しかしながら、殊、超現実主義＝シュルレアリスムは関しては、イギリスではなく対岸のフランスが発祥の地で、グループの首領であるブルトンの考え方と対照させてみると、そのイズムに対する西脇の理解とブルトンの思想とは大きくかけ離れており、後にブルトンを終始信奉していた瀧口のシュルレアリスム理解ともかけ離れていく運命にあった。

## 2. 『Ambarvalia』と『世界開闢説』について

『世界開闢説』が収録されている『Ambarvalia』は、1933年（昭和8年）、椎の木社より僅か300部限定で発刊された。従来の日本の詩歌の伝統である湿った抒情性、感傷性から隔絶した表現、古代ギリシアと太陽を思わせるその透明性と乾いた抒情で、日本近代詩に革命的な衝撃を与え、時代を超えた「現代詩の金字塔」としての意義を今日でも持つる詩集である。

当時のモダニズム系の若手詩人ばかりではなく、旧来の叙情派の代表と見なされていた室生犀星や萩原朔太郎さえもその新鮮な詩風に称賛を惜しまなかった。

西脇は、もともとそれまでの日本の近代詩歌の文語体、雅文調を嫌い、日本語で自身の詩歌を書くことを断念し、留学中に英語による処女詩集『Spectrum』（1925年刊）を刊行した。そして心情的には日本近代詩に訣別したつもりでいた一方、留学中に持参した萩原朔太郎の『月に吠える』（1917年刊）を読み、日本語の口語体で詩を書くことの可能性を彼自身強く感じていたという。後に、西脇は日本近代詩において口語自由詩を完成させたとされる萩原朔太郎について次のような感想を述べている。

萩原朔太郎さんの詩は驚くべき世界を先ず開拓したのはその語法とリズムの方面であった。（中略）僕は萩原から出発した。単に語法を学んだばかりでなく、その詩的態度も奉戴していた。萩原さんを読んだのは外国に住んでいたときで特に萩原朔太郎という偉大な詩人がいるという感じが強く印象を残した。（中略）萩原さんは僕のMAISTERである。<sup>(5)</sup>

ところで読者の日本人にとっては、敢えてアルファベットで表記され、発音も不確かで、意味も不明なこのタイトルについて、西脇自身が次のように語っている。

この詩のタイトル Ambarvalia 「アムバルワーリア」はケレースという古代ローマ人の農業の女神を祭る儀式のことであり、このことはローマ詩人ウェルギリウス（筆者注・ウェルギリウスのこと）の書いた「農業詩」（筆者注・邦題は『農耕詩』）の第一章の中に出ている。私は若い時から土俗学に興味があつて古代人の宗教に対して非常に詩的なあこがれをもっていたために近代人にはわからないような名をつけた。<sup>(6)</sup>

「近代人にはわからないような名をつけた」とあるが、この点については西脇が欧米の古代文学、中世文学に通曉している学匠詩人であること、そして留学地のイギリスでモダニズム隆盛の洗礼を受けていたことを考慮する必要があろう。

英語文学において1922年は、ジェームス・ジョイスが20世紀において最も先端的かつ重要なと言われる小説『ユリシーズ』を発刊した年であり、そして同年、T.S.エリオットが20世紀において最も影響力を持ちえた詩『荒地』を出版した年でもある。さらに付け加えれば、フランスにおいてブルトンが『シュルレアリズム宣言』を公刊したのは1924年であった。西脇が渡英したのは、1922年から1925年の4年間であり、まさにこうした文芸的大事件と直に遭遇し、リアルタイムでその空気を吸ってきたのである。両作品ともモダニズムを代表するもので、多分に衒学的な作品とされている『ユリシーズ』においては、ホメロスの古代ギリシャ神話、イリアス、オデッセイアを下敷きし、多くの駄洒落、パロディ、引用が含まれている。そして『荒地』ではフレイザー『金枝篇』の聖杯伝説を骨格とし、聖書、ダンテ、シェイクスピアなどの引用を文学的スタイルとして多用している。そういう「引用」「ほのめかし」の多用は、西脇の詩篇でも大きな特徴になっている。

また『ユリシーズ』も『荒地』も、現代を生きる一市井人の「思考の流れ」を神話的な物語として描いた作品であり、『世界開闢説』も『地球創造説』もそのタイトルからして、一個人の思考の流れを神話的な構成で描いた作品と考えてもいいだろう。

次に、『Ambarvalia』の構成を見ることにする。挙げられている三十の詩編は、それ以降に『三田文学』『詩と詩論』『椎の木』などの文芸誌に掲載されたものであり、発行のきっかけは文芸誌『椎の木』を主宰していた詩人百田宗治の勧めによるものであった。

先ず、フランス語の「LE MONDE ANCIEN」(古代)と「LE MONDE MODERNE」(近代)の大項目二部構成になっている。

古代編では、さらに「ギリシャ的抒情詩」と「拉典哀歌」の中項目二部になっており、前者には創作詩11編、後者にはラテン語文献の翻訳詩4編が掲載されている。

近代編には15編の詩が含まれ、内、後半の12編は一括して「失楽園」というタイトルで編まれており、『世界開闢説』(8連48行)もその「失楽園」の冒頭を飾る詩篇となっている。

『Ambarvalia』は1933年9月(昭和8年)に発行されるが、この「失楽園」部分の初出は遡ること7年前の1926年7月号の『三田文学』であった。一方、瀧口修造の『地球創造説』(2連267行)の初出は、1928年11月発行の『山繭』においてであり、その号の総ページ数36ページの内、17ページを占める長編詩として掲載された。

1926年の西脇『世界開闢説』掲載に触発され、瀧口が1928年に『地球創造説』という似通ったタイトル、モティーフを持つ詩を創作したと推察される。その辺りの事情について、詩人の田村隆一、英文学者の鍵谷幸信、批評家篠田一士の三者による西脇順三郎に関する討論の中で、西脇と瀧口の両者と親交のあった鍵谷が以下のように推察している。

「世界開闢説」というのと同じ時代に、瀧口修造さんが、「地球創造説」という作品を書いておられるんだな。あれは西脇さんの「世界開闢説」を読んで、自分ならああいう詩は書かないという気持ちを表現したということなんですね。瀧口修造の世界と西脇順三郎の世界が実に鮮やかに出てきますね。はっきり言うと、西脇さんの場合は、観念的なヴィジョンの世界に入らないね。日常的な世界へいい意味で下がってくるようなところがある。(中略) こんなことは瀧口さんはやらない。純粹蒸留の言語です。<sup>(7)</sup>

以前の論考<sup>(8)</sup>で、筆者は瀧口修造の『地球創造説』の分析、解釈を試みたことがある。

それは2連267行という長詩であり、構文は文法的に破格でないが、使用されている語彙は独特であり、それぞれの語彙の連結が意味の連結に繋がらず、読者はその意味を追うことには無力さを感じるといった体の詩篇である。

しかしながら、『地球創造説』を分析してみると、その詩のモティーフになっているのが「男女の恋愛、性愛」であり、そのテーマが恋愛に纏わる「観念表象の流動性」と理解された。その詩はもともとフランスのシュルレアリスムの実験的詩法、オートマティズム（自動筆記）に基づき、作詩されているのである。語彙同士が日常的な意味の連結をしないがゆえに、語彙間の文脈が寸断されることで、それぞれの語彙が自動的に物質化されることを目的にしている。

第1連151行は恋愛の予感と始まりと成就であり、第2連116行は女性の心変わりの予感と失恋、そして追想が神話的な時間軸と空間軸で描かれている。

本論において、瀧口の詩が先行した西脇の『世界開闢説』に触発されて書かれたという推論に立てば、逆に西脇の詩もモティーフは「男女の恋愛、性愛」だったと言えるだろう。

実際、『世界開闢説』の初出は「失楽園」というタイトルで括られ、その冒頭を飾る詩として『三田文学』に掲載された。「失楽園」と言えば、英文学においてはミルトンが書いた長編詩が有名だが、もともとは旧約聖書においてアダムとイブが蛇に唆され、禁断の木の実を食してしまい、楽園を追放されたことが「失楽園」の謂いである。

その点を踏まえて、両詩を対比して検証してみたい。

### 3. 『世界開闢説』と『地球創造説』のターミノロジー

端的に言うならば、両詩は同様のモティーフで創作が始まりながら、最終的に求めるテーマが違う。それは、両詩人の資質、背景、キャリアといったさまざまな要因の違いがあり、求めるところのイズムが違うと考えられる。

その点を具体的に考える前に、両詩人の取り扱う語彙の傾向、すなわちターミノロジー（用語法）についてまとめておきたいと思う。そして二人のターミノロジーを見てみると、傾向的に大きな相違が見受けられる。

作品 分類	世界開闢説 (西脇)	地球創造説 (瀧口)
昆 虫		蝶々 蟬 蝶 昆膜支類
獸 類	蛇	動物 馬 猪 ハリネズミ 土竜 虎 ライオン 野獣 牝羊 カメレオン
鳥 類	七面鳥 ミソソザイ	鶯 嬉 青鶯 家鴨 七面鳥
魚介類	鮭	鰯 金魚 魚類 海綿 海老 双殻類 水母
植 物	タリポットの樹 玉蜀黍 ボプラの樹 桑の木 忍冬 万年青（おもと）	紫陽花 鷄頭花 薔薇 ダーリア 朝顔 紫葵 芙蓉 菊 葦 胡桃 柚榴 林檎 栗 桔梗

「超自然主義」と「超現実主義」

	<u>バラ</u> サボテンの花 百合	
神		アポロ神 聖者 ソロモン Gargantua アフロディテ 幽靈 天使 Mammonノ悪魔 神様 マリア ミロノヴィーナス 太守の亡靈 妖精 Mater Dolorosa 魔物 半人半神
人物	人 フッケ 僕 女の人 我等 僕達 エスキロス嬢 正直者 友人 機械職工 トマスカルディ 家禽家 弁護士 ルカデラロビア 唱歌隊 何人	男 青年 陰謀者達 泥醉漢 彼 庭師 ギャルソン・ドテル 手術者 王 神学者 西班牙人 預言者 乞食 農夫 新郎 少年 騎牛士 暗王 エスキモー <sup>一</sup> 乳児 女 少女 彼女 令嬢 女王 美人
身体	髪 眼球 心臓 足の指 眼	髪 胸 手 唇 耳 背 髮 踝 肩 同體
場所	化学教室 橋 泉 大流 山 フランス 踏切 幼稚園 小丘の斜面 地上 権 窓 廊下 庭 養鶏場 噴水 都市	博物館 牢獄 首府 街 円形劇場
自然	水蒸気 暗黒 空気の寒冷 <u>太陽</u> オロラ シアボンの水 天空	太陽 夕日 落日 月 星 流星 光 輪光 月明 月下 空氣 空中 空間 青空 穹窿 風 微風 雲 虹 地上 陸 砂 海 海洋 海上 内海 波浪 波間 水平線 雨 急雨 雪 瀑布
時	夜中	夏 秋 六月 十月 一月 水曜 日曜 朝 正午十二時 四時 夜
物	白墨 材木 鉛筆 洋燈 ゴールデンバット 吹管 刷毛 煙管 マズリン 座布団 懐中時計 写真 籐椅子 トランク ウキボリ 毛糸のシャツ 葉巻 鏡	

\* 下線・太字の語は両詩に共通の語

『地球創造説』は全267行、『世界開闢説』が全48行と前者が後者に比べて、約5倍の行数があり、当然前者の語彙の種類数も多くなることは想定されたが、実際は倍程度であった。挙げた両詩の語彙を図表的にまとめてみると、かなり特徴的な傾向が見て取れた。

瀧口の『地球創造説』は、「物」に関する語彙がなく、「場所」に関するものがほとんどない。これは、瀧口が日常生活に関して接する「物」、経験している「場所」を自らの詩に盛り込まないところからきている。瀧口の詩は、日常生活に下りることなく、あくまで観念世界のままに留まることを志向している。

一方、西脇の『世界開闢説』は「昆虫」「獣類」「鳥類」「魚介類」の動物系が殆どなく、そして「神」に関する語彙はなく、「時」に関する語彙が殆どない。瀧口が動物系の語彙に、観念表象のダイナミズム、ポテンシャルティを暗喩的に置き換えているのに対し、西脇にそういう方法はない。また、「神」に関しての語彙は、詩に神性を持ち込みず、「時」に関しては、瀧口は兆しから終わりまでの恋愛の推移を季節、月、週、1日の推移に暗喩的に使用するが、西脇にそういうプロセスはない。

傾向的に、西脇の語彙項目は「植物」「場所」「人物」「物」で多い。やはり、西脇は日常生活の周辺的なものを自らの詩に埋め込んでいると言える。そして身辺の中に詩的なもの、ポエジーを見つけることが西脇の詩の特徴である。

瀧口は、フロイト理論に強い影響を受けていたフランス・シュルレアリスムがそうであったように、あくまで内面世界、無意識世界のポエジー、観念表象世界の側にいようとする。

西脇自身も認めているように、彼の世界観はフランス流の超現実主義ではなく、スタイル的に独特であり、周辺の自然環境世界と詩人の内面世界が感應するスタイルからして「超自然主義」者と言えよう。

#### 4. 「超自然」と「超現実」

西脇の世界観を見るために、『世界開闢説』の部分を以下に掲げ、適宜『地球創造説』の詩行を例示し、両詩の特徴的な部分を挙げていきたい。

##### 世界開闢説

(1連)

化学教室の背後に

一個のタリポットの樹が音響を発することなく成長してゐる

白墨及び玉蜀黍の髪が振動する

夜中の様に もろもろの泉が沸騰してゐる

人は皆我が魂もあんなでないことを願ふ

人は材木の橋を通過する

ゴールデンバットをすひつつ

第1連は、恋愛の始まりの予感が暗示されている。化学教室とは自らの閉ざされた心理空間で化学変化が起こっていることへの暗示である。大きな葉が拡がり伸びるタリポット椰子の樹、白墨、トウモロコシの髪、そして泉など、おそらく自らの周辺にあるそれらのものが自らの心理状態に感應して動搖しているのだろう。ここでの「人」は冷静さを装うもう一人の自我かもしれない。大衆的なタバコの銘柄を具体的に出すことによって、実際的な現実に引き戻される。

ここで対比的に瀧口の『地球創造説』の冒頭の詩行を挙げてみよう。

両極アル蟬ハアフロディテノ縮レ髪ノ上ニ音ヲ出ス  
男モ動物モ凡テ海ノヨウニ静カニナル  
アフロディテノ夏ノ変化ハ  
細菌学デアル  
零レルヨウナ花  
汝ハ月下ノ青年ノヨウニ神経質トナル  
陰謀者達ハ  
電燈ヲカカゲ波間ヲテラシテイク<sup>(8)</sup>

同様に、恋愛の始まりの予感が暗示されている。しかし、西脇とは表現方法に違いがある。西脇の詩的イメージは現実的な光景と対応できるが、瀧口の詩的イメージには現実的光景との対応関係は見い出せず、心理状態の起伏の激しさが超現実的イメージで再現されている。「両極アル蟬」は感情の起伏激しい騒音の暗示、「アフロディテノ夏ノ変化」「細菌学」は暑苦しい、増殖するイメージで徐々に昂ぶる感情を示している。そして一転して、「月下の青年」「神経質」「陰謀者」「電燈ヲカカゲ」などは沈鬱な感情をイメージしている。

(4連)

忍冬におほはれたエスキロス嬢の家より遠く  
しかしあれの家に近く一人の正直者が  
修繕すべき煙管を探求するために彼の水蒸気を鳴らす  
おれの友人はみんな踏切の向方に移転してしまった  
そこにはトマス カルディの写真がある  
一つの非常に大きいマズリンの座ブトンがある  
石油ストーブがある  
さうして机の上に万年青と  
実際的にペッチアンコな懐中時計がある

「忍冬」は「すいかずら」とも「にんどう」とも読む。花は5月から7月にかけて咲くが、冬を堪え忍ぶことから、この漢字が当てられている。

エスキロスは架空の名前である。そしてトマス・カルディは架空の名前だが、意図的に著名な英国作家トマス・ハーディを想起させ、不運な女性の一生を描いた彼の作品『ダーバヴィル家のテス』を想起させる。

植物の万年青の読みは「おもと」である。漢字のイメージは「常に青色」というイメージで、漢字の意味の遊び、英語の楽しい響きで幅広い教養を散りばめる学匠詩人西脇の特徴が示されている連である。

瀧口には西脇のような文学的教養を醸し出す詩行はなく、あるのは次のような語彙同士の対立と緊張だけである。1連の最終部分では、反発する語彙同士の緊張関係で恋愛対象への感情が表現される。

天真爛漫ノ太守ノ亡靈  
凡テノモノガ削除サレタ亡靈  
妖精ノヨウナ薔薇  
魚類ノ薔薇  
態度アル薔薇  
滑稽ナ薔薇  
無感覺ナ薔薇  
焰ノ薔薇

1行と2行の「亡靈」は、思いを寄せる男性が自身を見つめ、身体的実体のない「亡靈」という形象にその觀念を託している。「天真爛漫ノ太守ノ」から「凡テノモノガ削除サレタ」という形容の推移が恋愛の推移、感情の推移を暗示する。

3行から8行までの「薔薇」は、男性から恋愛対象である「女性」への思いを植物形象に託している。動物ではなく、植物を当てているのは、対象としての彼女がすでにダイナミズムに欠けた対象になっており、実世界の存在ではなく、觀念世界の存在と化していることを示している。

その「薔薇」を形容している「妖精ノヨウナ(=憧憬)」「魚類ノ(=官能的)」「態度アル(=変容)」「滑稽ナ(=距離感)」「無感覺ナ(=無関心)」「焰ノ(=激情)」というイメージ群が並置され、それらのイメージの対立、衝突により「薔薇」のイメージはますますオブジェとして屹立する。

## まとめ

1924年に発刊された『シュルレアリスム宣言』の中で、ブルトンはシュルレアリスムの定義を次のように謳っている。

男性名詞。心の純粹な自動現象であり、それにもとづいて口述、記述、その他あらゆる方法を用いつつ、思考の実際上の働きを表現しようとくわだてる。理性によって行使されるどんな統制もなく、美学上ないし道徳上のどんな気づかいからもはなれた思考の書きとり。<sup>(10)</sup>

本来のシュルレアリスムの理論は、フロイトの精神分析学理論に基づいている。その理由として首領格のブルトンやアラゴンが精神科の医学生であったことの影響も大きい。ヨーロッパの堅固で伝統的な文芸思潮を打破するために、無意識の領域に踏み込む必要があったのだろう。

瀧口修造は、遠く離れた日本で文献を通して、シュルレアリスムの定義に忠実であろうし、それが彼の詩作品となって結実した。『地球創造説』もその一つである。

一方、西脇順三郎は「超現実」主義に対して、独自の考え方を持っていた。

超現実主義の詩とは人間の何処までも生きんとする盲目の意志が現実の世界を突き破っ

て完全にならんとするエネルギーを表示する努力の主であると簡単に論ずることが出来る。生きんとする意志は創造者の意志である。<sup>(11)</sup>

西脇にとって、詩の創作行為は無意識的ではなく、より意識的になることであって、瀧口の創作方法とは逆のベクトルを向いていた。その方法論から『世界開闢説』ができあがったのである。

そのような認識の違いはあれ、「シュルレアリスム」の名の下、質の高い両作品が併存できていたというのが、当時の詩壇状況であったことは記憶しておかなければならないだろう。

#### 引用文献・参考文献：

1. 西脇順三郎『西脇順三郎全集 第1巻』筑摩書房, 1982年
2. 西脇順三郎『西脇順三郎全集 第2巻』筑摩書房, 1982年
3. 西脇順三郎『西脇順三郎詩論集』思潮社, 1979年
4. 新倉俊一『西脇順三郎全詩引喻集成』筑摩書房, 1982年
5. 神奈川近代文学館等編集・発行『馥郁タル火夫ヨ—西脇順三郎』1994年
6. 『現代詩 読本9 西脇順三郎』思潮社, 1979年
7. 『現代詩 読本15 瀧口修造』思潮社, 1980年
8. 鶴岡善久『日本超現実主義詩論』思潮社, 1966年
9. 鶴岡善久『シュルレアリスムの発見』湯川書房, 1979年
10. 澤正宏・和田博文編『日本のシュールレアリスム』世界思想社, 1995年
11. 分銅惇作・吉田熙生編『近代詩物語』有1928年～1931年斐閣, 1978年
12. 教育出版センター編『詩と詩論』復刻版全15冊（1928年～1931年）, 厚生閣書店, 1979年
13. 日本近代文学館編『山繭』復刻版全36冊（1924年～1929年）, 山繭社等, 1974年
14. 田村書店編『衣裳の太陽』復刻版全6冊（1928年～1929年）, L.E.S社, 1987年
15. 田村書店編『馥郁タル火夫ヨ』復刻版全1冊（1927年）, 大岡山書店, 1987年
16. 田村書店編『LE SURREALISM INTERNATIONAL』復刻版全1冊（1930年）, 富士原清一発行, 1987年
17. 『日本の詩歌14 萩原朔太郎』中央公論社, 1979年
18. 『日本の詩歌12 木下奎太郎 日夏耿之介 野口米次郎 西脇順三郎』中央公論社, 1976年
19. 岩崎美弥子『瀧口修造 沈黙する球体』水声社, 1998年
20. アンドレ・ブルトン『シュルレアリスム宣言 溶ける魚』巖谷國士訳, 岩波書店, 1992年

#### 註：

- (1) 上記引用文献6, 内、鍵谷幸信「年譜」p.259
- (2) 上記引用文献7, 内、瀧口修造「自筆・年譜」p.240
- (3) 上記引用文献7, 内、瀧口修造「自筆・年譜」p.241

- (4) 上記引用文献15, 内、西脇順三郎「序文」p.5
- (5) 上記引用文献6, 内、西脇順三郎「MAISTER 萩原と僕 朔太郎からの出発」p.205 初出：『椎の木』1937.2
- (6) 西脇順三郎「近代人の憂鬱」、『Ambarvalia』復刻本の付録解説書より
- (7) 上記引用文献6, 内、鍵谷幸信・篠田一士・田村隆一「対談 諧謔と幽玄の哀歌」p.24
- (8) 『「地球創造説」におけるブレイク的ターミノロジー』筑波大学文学研究会発行：文学研究論集第3号、1986年12月
- (9) 上記引用文献1, p.55-58
- (10) 上記引用文献7, p.35-40
- (11) 上記引用文献20, p.46
- (12) 「上記引用文献3, 内、「超現実主義詩論」p.34 初出：1929年11月